夏休み納涼沢

奥秩父　小室川

後藤

社会人一年目の夏休みだというのにノープランでいた私を見かねてくださった栗原さんが、沢に誘ってくださった。夏らしく読みづらい天候が続く中、奥秩父の沢を選択。田辺さんと、他会の田宮さんも参加してくださったおかげで、夏の思い出を作る機会を逃さず済みそうだ。などと考えながらうだるような熱帯夜の都心を横切り集合地へ向かった。

8/18　晴れ

国道すぐの林道ゲートから出発。黙々と林道を歩いてアプローチするが、沢への降り口が思いの外近く、林道を行き過ぎた。事前情報から降り口には道標があるとのことだったが、すっかり見落としてしまった。こまめな現在地確認が大事と改めて認識。さて、気を取り直して入渓。東京近郊の沢とは思えぬほどに水が澄んでいて気持ちが良い。が、心なしか水量があるような…

すぐの滝には残置ロープが下がっておりありがたく利用させてもらう。次の滝は普段なら登れるのかも知れないが、水量も多いので左岸から巻く。5mほどの懸垂下降で沢に降りる。S字峡は入口の滝が大分迫力を増していたようだった。栗原さんが残置を利用して右岸の棚に上がる。後続して上がると、S字峡入口の渡渉が若干難しそうだったが、流れの浅いところを付けば突破できそうだったので自分がトライすることに。棚から懸垂して流れに脚を入れると中々の水圧。スパッツを履き直して本気トライ。上流に流れの浅いところがあったので上手くそこに手を付きながら突破。渡った先に残置ハーケンがあったのでそこでロープをフィックス。その先で栗原さんを待った。安定した場所でロープを張り直して田辺さんと田宮さんを迎え入れた。普段なら特段難しくも無いのだろうが、中々スリルのあるプチゴルジュ突破だった。

時間が思いのほかかかったので先を急ぐ。途中右に石門と呼ばれる奇岩を発見。事前情報だと何なのかよくわからなかったが、実物を見て納得。石橋の小さいやつであった。せっかくなので皆でくぐった。そこからは登れる小滝を適当に越えたり、場所によっては少し緊張を強いられる渡渉をこなしたりして進んだ。小室の淵と思しき箇所では、入口の滝を泳いで取りついて越えてみたものの、その先の5m滝が難しそうだったので、退却。右岸から巻いた。その先に雨乞の滝。増水もあってか、中々の迫力だった。個人的には、仙台近郊のゴルジュの鳳鳴滝を思い起こさせた。もっとも、こちらの方が清流なこともあってありがたく見えるのだが。これも右岸から巻く。

そしてこの日最後の大仕事、40m滝が現れる。下段は各自適当に登る。自分はヌメリを嫌って水流を行ったらめちゃくちゃなシャワークライミングになった。正直水圧で落とされそうだった。上2段は念の為ロープを出す。トップを任されたが、適当にルーファイして取りついたら一手目でスリップした。ルーファイし直して再トライ。残置フル活用で突破して後続を迎える。本来であればもう少し高度を上げておきたかった（明日の悪天候を鑑みて早めに下山するため）が、増水などで思いの外てこずらされたこともあり、今日はここで終了。広い平坦地と適量の薪に恵まれた良い場所だった。

8/19 晴れ後雨

悪天を避けるため、6時発。この辺りから、トロッコやワイヤーの残骸が大分目立つようになり、かつての山での営みが偲ばれる一方で、沢のヌメリも目立つようになる。結果、沢よりも岸辺のガレが積もった箇所を歩くようになる。途中も見栄えのする滝があったりして、最後まで楽しませてくれる。やはりヌメリがあるが、適当にガバがあるので難しくは無い。しかしながらここでもまだ水量があったので自分はいくらかシャワークライミングしていた。

最後の滝も終わると、ガレと苔と枯れ木が堆積した地形となる。これを抜けると、少し急な笹藪斜面となる。ふくらはぎをいたわりながら登ると稜線登山道に出る。思いの外登山客で賑わっていた。初めての大菩薩嶺ということで、目では少しばかり景色を楽しみながら、足は午後の悪天を念頭に素早く動かすのであった。登山路を駆け下りて林道に着くと同時に雨が降り出した。不幸中の幸いと、林道を黙々と歩く。途中休憩を挟みながら延々と歩いて車に着いて、着替えを終えて車に乗り込むといよいよ本降りになった。再び、不幸中の幸いだったとメンバー皆で健闘を称え合った。

DATA

山行日 2023年8月18日(金)～19日(土)

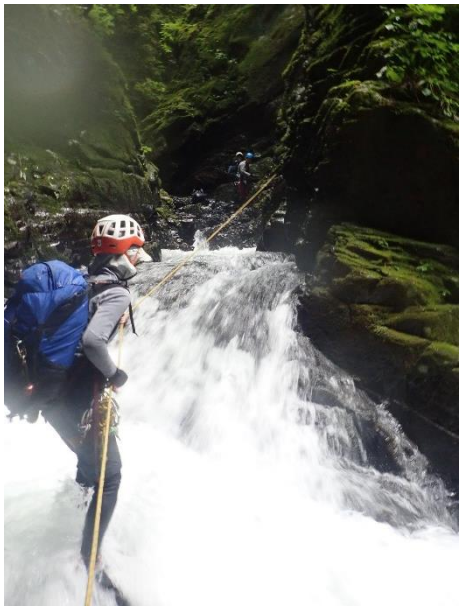
行程 8/18 小室川入渓点(7:35)―S字峡(10:05)―石門(12:10)―小室の淵(12:55)ー雨乞ノ滝(14:30)―40m大ナメ滝(14:40)―テン場

8/19 テン場(6:15)―蛇抜沢出合―多段10m滝(7:50)―大菩薩嶺登山道(9:55)―駐車場(13:45)

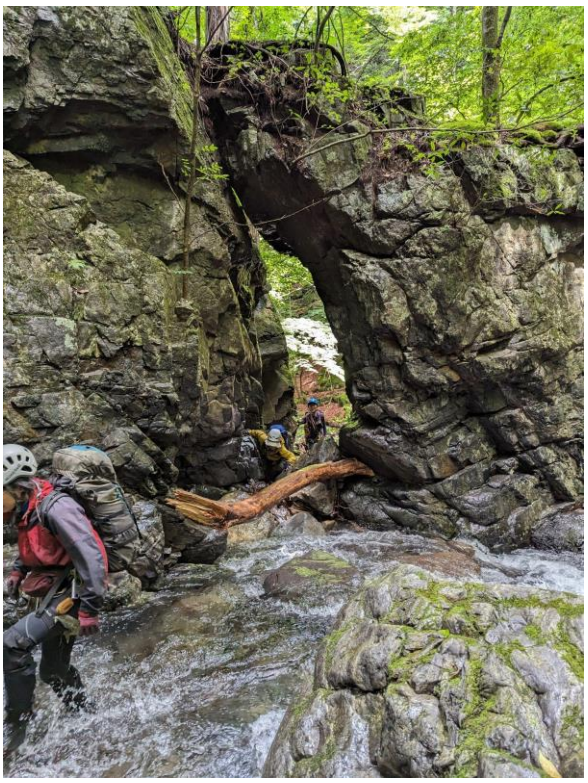
グレード 2級上

地形図 丹波、柳沢峠、大菩薩峠

メンバー L栗原、田辺、後藤、他1



浅いが水勢が強くプレッシャーを感じる渡渉



石門をみんなでくぐる

必然性が無くともシャワークライミング。夏ですもの。